

浅野研眞研究

— 晩年の仏教社会事業との関わりを中心に —

菊池正治

A Latter Life and Buddhist Social Work of KENSHIN ASANO

Masaharu KIKUCHI

はじめに

浅野研眞のわが国の近代社会事業界での足跡は、一般的に『日本佛教社会事業史』(1934年 凡人社)の著者として知られている程度である。しかしながら、彼については戦前プロレタリア教育運動史上で度々取り上げられ、そこでの浅野の思想や行動については、研究の蓄積がなされている。また、昭和初頭における仏教革新(復興)運動史上においても彼の名前が表舞台に度々登場しており、当時の仏教革新(復興)運動の指導者の一人でもあり、生前の浅野とも親交の厚かった友松円諦は、浅野の命終直後の1939年9月、彼の主宰する機関誌『真理』において仏教界が失った三学者として矢吹慶輝、小野玄妙と並び浅野の名前を挙げている。教育界、仏教界での浅野の業績に比して社会事業界におけるそれは、確かに際立ったものではないかもしれないが、しかし、この分野での彼の業績を軽視しては浅野の人物像を描くことは不可能と考える⁽¹⁾。

よって、この小論においては、社会学者、プロレタリア教育研究者、そして仏教者、さらに加えるならば仏教社会事業研究者・実践者など多様な方面で活躍し、あるいは行動した浅野研眞について、特に彼の晩年における仏教社会事業に関係する研究とその周辺分野を、彼が晩年心血を注ぎ発刊しつづけた個人誌『佛陀』の諸論稿と関係者の証言に基づき従来の浅野研究を補填し、仏教社会事業研究・実践の意味を彼の晩年における思想と行動の上に位置付け、浅野晩年の人物像を描き出すことを目的とする。

1. 誕生・日本大学入学そして教育労働運動へ

浅野は、1898(明治31)年7月25日、愛知県中島郡祖父江町の永龍寺(真宗大谷派)住職である父養眞、母たけの子として誕生し⁽²⁾、1939(昭和14)年7月7日に没しており、わずか40歳の短い人生を疾風の如く駆け抜けた人物である。地元の宗門系の尾張中学校を1917年卒業の後、京都・大徳寺で2年間禅の修業を修め、その後一時期、函館刑務所の教誨師として赴任している。真宗の寺院に生を享けた彼が、どのような事情によって他宗の寺院である大徳寺で修行を修めたのか現在のところ不明であるが、一般的には非常に稀な事例である。しかし、このことの体験が浅野の仏教信仰、すなわち一宗一派の祖師への信仰というよりも広く大乘仏教へのそれという形態で展開することに影響を与えたと考えることができる。

浅野をして本格的な社会学徒として、またプロレタリア教育研究者としての途を歩ませる方向を決定づけたのが日本大学文学部社会学科への入学であった。1925年3月同上大学を卒業し、同学科の助手として大学に籍をおきながら、日本大学高等工学校の講師を務めている。この間注目すべきことは、大学在学中の身ではあるが『社会批判』パンフレット第1冊「インタナショナル発達史論」(1922年)、同上パンフレット第3冊「社会思想と社会運動」(1923年)、同上パンフレット第5冊「マルクス哲学の貧困—ブルードン氏の貧困の哲学への一答弁—」(同上年)などを著者あるいは編者として著しており、

さらに、1923年には単行本として『レニンの社会学説』を翻訳している⁽³⁾。ここに浅野の社会学研究者としての能力と思想の方向性を窺い知ることができ、同大卒業直後に東京労働学校設立に参加し教務主任を務めていることより社会的な実践についても関心を持ち、生涯、研究と実践を同時に志向した浅野の原型的実像を早くもここに発見できる。

浅野の社会学の研究を一層広め・深めていく契機になったのが1928年の文部省派遣でのフランス留学であった。その目的は、社会学・社会教育の調査研究にあり、1930年に帰国している⁽⁴⁾。わずか2年間の留学ではあったが浅野は精力的に関係資料・文献の蒐集と研究を進める傍ら教育労働者インタナショナル（エドキンテルン）へのわが国の教員組織教文協会の加盟への働きかけを展開している。

浅野とわが国の教育労働運動との関わりは、日本大学助手時代から『教育新潮』への投稿を通じて徐々に関係者との親交を深めており、浅野は積極的に諸外国の教育運動などについての動向を紹介する啓蒙的役割を担っていたようである。したがって彼がフランスに留学する以前から階級的な立場からの教育運動に関心を持っていたことになり、国内のこれらの関係者との交流も極めて深いものであったと推察できる。このことは、浅野の留学に際して教育文芸家協会（1929年に教文協会と改称）の松本貴平よりエドキンテルンと連絡をとって日本の教育運動団体としての加盟について申し込みの条件・資格の調査と交渉、エドキンテルン関係文書・資料・機関誌紙ニュース類の入手の2点の依頼を受けていたこと⁽⁵⁾がその証明となる。

1930年2月、フランス留学を終えて帰国した浅野の活動の中心は、教育労働に関する研究とプロレタリア教育運動の実践に重きを置くようになる。研究面では『マルクス主義と教育問題』（訳編 1930年）、『新興教育学』（訳 1931年）、『プロレタリア教育の諸問題』（著 同上年）などであり、他方、実践面としては、プロレタリア教育学研究所創設に参画、プロレタリア科学研究所への加入、新興教育研究所の創立に関与（以上1930年）など精力的に行動している。浅野の存在は教育運動界において研究・実践両面において重要な位置を占めていた⁽⁶⁾。しかしながら、浅野の教育労働運動への関わりは、1933

（昭和8）年頃より疎遠になっていく。その理由は、この頃になると国家により社会運動への弾圧が激化し、プロレタリア教育運動もその対象となり、関係諸団体も解散を余儀なくされていった背景が存在していた。

2. 教育労働運動から仏教研究・運動へ

この状況下で浅野の関心・活動領域は仏教方面へ移行している。教育界から仏教界への移行、この事実の解釈について「転身」と捉えるか、または、元来、彼の関心領域としての仏教への「回帰」として捉えるか、いずれの見方をするかによって浅野の人物像は大きく分かれる。

峰島は、浅野が教育界から身を引く要因を国家による弾圧統制を外在的なものとし、内面的な理由として「かれが本来仏教者であった」⁽⁷⁾ことを指摘し、浅野が仏教研究に邁進することを、元来、仏教者である浅野にとっては必然のことと理解している。

教育界から訣別した浅野は、その後、仏教に関する研究と活動を展開する。1932年には、友松円諦を中心に仏教を社会経済史的観点から研究を進める目的で「佛教法政経済研究所」（所長・滝本誠一郎慶大教授）が設立され、浅野もこれに参加している。翌年には、友松円諦、長谷川良信、妹尾義郎、林靈法などの仏教関係者や木田喜代治、円谷弘などの社会学関係者など、当時の仏教界の新進気鋭の同志と社会学研究者等と「佛教社会学会」を創設している。設立趣旨では「新興科学としての佛教社会学の基礎づけこそは、吾々に課せられた当面の学的資料であり、吾々による国際学会への最大の寄与であらねばならぬ」⁽⁸⁾として、その意気込みを示している。同学会はこれ以来、原則として毎月一回の定例研究会を継続して行っている⁽⁹⁾。

この時期を境として浅野の研究・実践領域は完全に仏教関係に移っており、教育関係の業績は1933年以降皆無となる。この時期の浅野の研究を若干掲げておくと、「一向一揆の基礎概念」（『現代佛教』1932年4月）、「一向一揆を生んだ社会環境」（『同上誌』同上年9月）、「実如上人と一向一揆」（『同上誌』同上年11月）、「明治佛教の社会事業」（『同上誌』1933年7月）、「蓮如上人の経済思想」（『佛教法政経

済研究所モノグラフィ―』同上年3月),「佛教の社会起源論」(『現代佛教』同上年10月)などがあり、仏教研究の中でも特に一向一揆への関心が強かったことをその業績より読み取ることができよう。浅野の一向一揆への関心の経緯は、彼の言葉がそれを示しているのものでそのまま紹介しておく。

思へば私の一向一揆の研究は、もう十数年の歴史を持つ。尾張の西端、木曾川畔の寒村の一貧寺に、農民出身の真宗僧侶を父として生を享けた私は、その物心ついた時分から父の物語つてくれた一向一揆の史話に、心ひそかに興味を感じしめられてみたものだ。(中略)、その後、上京して、社会科学を学び、エンゲルスの『ドイツ農民戦争』等を披見するに至つて、一向一揆の社会史的研究を企図するに至つた。而してその第一回の研究発表は、既に昭和2年の交、極めて不完全なもの乍ら、先ず数回にわたつて『現代佛教』誌上に為された⁽¹⁰⁾。

浅野の一向一揆の本格的な研究は、昭和の初頭より着手されていたが、彼がこの問題について関心を寄せ始めたのは既に幼少の頃よりであり、中学時代には一揆の史跡を一人で探訪している。そして何よりもこのテーマに関心から研究へと高めさせる契機をなしたのが日本大学入学であったことを先の証言は明らかにしている。このことより、彼の仏教課題(一向一揆を含む)への関心は教育運動からの訣別後に現れるものではなく、それに関与しながらも関心領域の底流には常に仏教問題が存在していたと考えることの方が自然であり、先の峰島の指摘も妥当なものと言えよう。そして、これらが具体的な研究作業として着手されたのが昭和初期の段階であり、本格的に展開されていったのが1933年以降と考えられる。

仏教に関する浅野の研究は、教育労働運動に関わった時期と同様に運動という社会的活動に関係しながらも精力的に展開される。ここでは1935年までに単行本として出版されたものだけを紹介しておく。『無神論と反宗教運動』(1932年 大雄閣)、『唯物史観と佛教』(同上年 大雄閣)、『社会の変革過程と宗教』(同上年 大雄閣)、『蓮如上人の経済思想』(1933年 佛教法政経済研究所)、『宗教法規全書』(同上年 大東出版社)、『社会宗教としての佛教』

(1934年 大雄閣)、『日本佛教社会事業史』(同上年 凡人社)、『宗教法案資料』(同上年 東方書院)、『佛教社会学研究』(1935年 凡人社)、『佛教社会事業の展望』(同上年 佛陀社)、『青年死刑囚の最後の手紙』(同上年 佛陀社)、『佛教的経済制度としての無尽』(同上年 佛陀社)、『農政家僧浄因に就いて』(同上年 佛陀社)などである。

これらの業績を見ると浅野が如何に仏教研究に精力的に取り組んでいったかを窺い知ることができよう。勿論、その後も研究の成果を次々と出版・発表し、仏教研究を社会経済史的側面から分析する分野を先導的に開拓していった。合わせて、1933年9月から浅野主宰により雑誌『佛陀』を毎月一回発刊し、自身の巻頭論文を毎回掲載している。

他方、先の「佛教社会学会」の研究活動に加えて、1935年1月には「時代の先覚者としての有能真摯なる現代的佛教徒の養成」を目的として「佛教社会学院」を開設し、仏教教育・仏教者養成の実践にも着手している。

浅野が以上のような仏教研究・実践を行った時代的背景は、昭和恐慌のもと徐々に進行するファシズムと大陸侵略、そして戦時色が強まっていく過程であった。宗教界では、佐野学の『マルクス主義と無神論』(1927年刊)に代表されるマルクス主義からの宗教批判・否定、加えて、左翼運動としての戦闘的無神論者同盟や日本反宗教同盟などが相次いで生まれ反宗教運動が高揚した。しかしながらこれらの運動は戦争体制の進展に伴う思想統制のもと国家権力の弾圧により1935年前後完全に解体させられる。

反宗教運動は既成の仏教教団にとっては脅威的であった。しかし、これらの批判や否定論に十分に応える取組みがないままに、運動が国家の力によって壊滅させられることによりその批判勢力の脅威より解放されることとなる。したがって、既成の教団はこの「歴史的批判・否定」を内実化することなく、何事も無かったようにその危機を繰り抜ける。この中であって仏教界内部から1931年に「我等は、全既成宗団は佛教精神を冒したる残骸的存在なりと認め、之を排撃して佛教の新時代的宣揚を期す」として妹尾義郎によって「新興佛教青年同盟」が、また、同年に高楠順次郎を委員長として「全日本佛教青年会同盟」(浅野も関係する)が、さらに先に見た友

松・浅野を中心に創設された「佛教法政経済研究所」がそれぞれ創設され、新たな仏教の在り方を模索していく動向も現れている。反宗教運動消滅後は、国家の「日本精神」の流布に伴い仏教ブームがマスコミで持て囃され仏教復興として社会の注目を浴びることとなる。

既成仏教教団は、今一つ大きな問題に直面していた。それは、新興宗教の成立である。政治・経済危機を背景とする国民生活の不安の中から世界救世教、生長の家、ひとのみち、創価教育学会などが次々と誕生していった。このような新興勢力に対して既成教団の大半は、何等な術もなく唯他人事のように傍観するのみであった。浅野は、「社会正義・正法護持の切々たる大菩提心に立脚し断々乎として社会正義及び正法正信の大施を押立て、常精進して止まず、以て斯る妖邪の魔軍を撃滅掃除せんことを期す」⁽⁴¹⁾としてそれへの批判と撃滅運動を通して既成の大乗仏教の正法性・正当性を明らかにしようとした。

浅野の後半期は、仏教研究と仏教革新運動に全精力を投入し、それは、彼自身が自らの死期を自覚したかのような壮絶な闘いであった。寸時を惜しんでの調査研究、あるいは講演出張と全国を飛び回る日々が続いている。浅野には、何時の頃からか腎臓病の持病があり病魔との闘いの日々であったことは事実である。病床にて清沢満之の『臘扇記』や『有限無限録』などにひきつけられ、同じ病歴と同郷の出身であることより清沢に浅野自身をダブらせて読み耽っている。東奔西走し家庭を顧みる暇にも恵まなかったものの、時として妻や子どもとハイキングを、また友人の世話により箱根旅行を楽しんだことなどもあり、父親としての顔も覗かせている。しかしながら、彼の経済的生活は決して恵まれたものではなく、留学中途から帰国後、そして晩年まで貧困状態から脱することはなかった。1939年7月7日、41歳の誕生日を目前にして没した。法名は一向院釈研眞である。

3. 雑誌『佛陀』について

浅野が主宰した雑誌として『ソシウス (Socius)』、『青年佛徒 (The Young Buddhist)』、『国際佛教通報 (The International Buddhist Bulletin)』、

そして『佛陀 (Le Bouddha, Bulletin Mensuel)』などがある。

こうした数多くの雑誌の編集と発刊に関係したもので『佛陀』誌の位置は、浅野の晩年、すなわち、彼が教育労働運動から仏教運動へと活動の場を転じた1933年9月より発刊しており、その終刊は1939年6月、即ち浅野が命終する一ヶ月前まで毎月一回発行している。この点から、同誌は浅野の晩年の思想と行動を記録した浅野研究にとっては欠かすことのできない第一級の史料の意味を持っているものと考えられる。しかしながら、今日までの浅野研究においては、同誌の存在は知られていたものの散逸が激しく、部分的には利用可能であったものの、その全貌より研究を展開することはできなかった。今回、幸いにも浅野の長男にあたる浅野文雄氏のご協力にて、同誌の全巻を発見することができ、閲覧の機会を得たので同誌によって晩年の浅野像を検討することが可能となった。そこで、この小論において『佛陀』誌を素材にして浅野晩年における仏教社会事業に関する研究・思想と実践を中心に検討することとし、上記小論の目的を論及したい。

その前に『佛陀』誌についての若干の書誌学的検討をなしておこう。

本誌は、通巻69号を数えることができ、月刊誌の形をとって毎月一回発行されている。休刊になったのは、1939年5月のみの1回であり、各号によっては頁数の多少はあるものの、月刊誌としての役割は十分に果たしている。編集発行兼印刷人として浅野研眞の名を上げており発行所を佛陀社としている。発行所の住所は、東京市渋谷区穂田1の1となっており、これは浅野の自宅住所である。1934年1月より浅野の引越しにより、発行所も東京市外吉祥寺337に変更している。発行所である佛陀社は、佛陀社三大期誓を「一、上求菩提・下化衆生の現代的意義を顕揚し、全人類の求道・証悟に資せんことを期す。一、佛祖の行履を現代に生かし、広汎なる社会救護を果遂せんことを期す。一、犠牲的精神に基き、共栄共栄の無搾取社会を実現せんことを期す」と宣している。

本誌の体裁はA5版で、頁数はおおむね16頁前後であり、1937年5月（第5巻第5号）頃より7・8頁と縮小されている。その要因として財源の問題が

あることは指摘するまでもないが、加えて、毎月の編集から刊行までを浅野一人で行うことの労力の問題が横たわっていた。「本号は又ガタ落ちの減頁ですが、雑誌のレーゾン・デートルは、決して其の頁数の尠大なる点にあるのではなくて、その中に何か少しでも示唆する所がある点にあるのです」⁽¹³⁾として、頁数が縮小されても内容的には従前と何も変わらず、存在価値があることを強調する。

印刷部数については不明であるが、一部5銭で販売しており、この価格は終号まで変えていない。1933年内(4号分)の同誌に関わる収支を収入50円30銭、支出を110円12銭と報告しており、不足額59円82銭になり、同誌発行の経済的困難さが明瞭に示されている。こうした経営難の打開策としてであろうか維持費一口一円の協力者を、あるいは終身読者として一時金十円を募っている。最終的には終身読者として道端良秀・矢吹慶輝・久保田正文など57名の協力を得ている。同誌1934年2月より「本誌の収益は之を社会救護費に充てます」との文章を掲げているものの、実際は、収益どころか赤字続きの連続であり、浅野が願ったような社会救護費への支出を行うことは困難であり、実際、同誌の記事の中にも支出の事実は発見することができない。佛陀社の同誌発行に対して協力を惜しまなかったのが日本大学である。同誌上に数多く日本大学の学生募集の宣伝広告を掲載しており、広告費の金額がどれ程であったかは明らかでないが同誌発行を支える重要な収入源であった。

つづいて同誌の内容について見ると、初めに研究的な論考を1・2本載せ、その後に随筆的な文章や記事などが紹介されている。最後に、同誌読者の感想を誌友通信として紹介し、編集後記で結ぶ形を基本としている。編集後記においては浅野のその時々々の活動なども報告されており、晩年の彼の行動をこれによってかなり詳細に知ることができる。時折、浅野出版の書物の書評を加えたり、特集号なども企画しながら、内容的には一般読者が関心を持てるようなその時代の仏教問題を取り上げている。

同誌発刊の狙いについて浅野は「これは主として大乘佛教の社会理論及び実践に関する研究を企図するものであるが、吾々の見るところによれば、この方面の研究こそ現代社会不安に処する大乘佛教徒の

重大な使命であらねばならぬ」⁽¹⁴⁾として、伝統的な教学研究・護教的歴史研究ではなく「大乘仏教の社会理論・実践」の研究を主眼とする視点からの仏教研究を進めることを宣言している。したがって、同誌に見る諸論稿は、現代の仏教問題を社会的な視点(浅野の方法論からすれば社会学的と言った方が良さかもしれないが)から分析し、大乘仏教の実践を社会的・歴史的に解明しようとする新たなスタイルを持つものばかりである。ここに社会理論として認識された指針によって「仏教実践」を志向しようとするものであり、同誌が単なる研究レベルに止まるものでないことは、誌上において仏教実践的な事例が度々取り上げられていることでも理解できる。

執筆者は、毎回のように浅野自身が筆を執っており、個人誌的な色彩を持っているが、発行当初は誌友の研究も多く紹介されていた。しかし、頁数の縮小に伴い1937年11月以降は殆ど浅野の論稿のみとなっている。

論稿の内容は、多方面にわたっているが、概略的に分類すると、大乘仏教の社会的・歴史的研究、仏教復興運動に関する研究、親鸞をはじめとする高僧の伝記的研究、新興宗教批判に関する研究、宗教教育に関する研究、そして仏教社会事業に関する研究などであった。

4. 『佛陀』誌上の仏教社会事業関係論稿

『佛陀』誌上における浅野執筆による仏教社会事業に関する研究の論稿を抽出しておこう。

「大乘佛教の社会实践」(第1巻第1号)、「利用されぬ農村寺院」(第2巻第2号)、「佛教的社会実践について」(第3巻第6号)、「隠れたる佛教社会事業家を顕彰せよ」(第4巻第4号)、「間引小考」(同上巻号)、「聖徳太子と社会事業」(第5巻第3号)、「農村寺院と農繁期託児所」(第5巻第5号)、「布施論」(第5巻第6号)、「農村寺院と医療施設」(同上巻号)、「非常時と社会事業」(第5巻第8号)、「佛教的社会観」(第5巻第10号)等である。

仏教社会事業についての論稿は以上のように少なくはない。これに加えて、後に詳述する佛教社会学院の出版によるパンフレットで仏教社会事業に関するものとして、「佛教的経済制度としての無尽」

(1935年)、「古代印度の佛教社会事業」(1936年)、「古代支那の佛教社会事業」(同上年)、「聖徳太子と社会事業」(1937年)なども発表しており、浅野の仏教社会事業に関する関心の度合いの高さをこれらの業績の数によっても窺い知ることができよう。

さて、これらの研究の内容の検討をなすことにするが、浅野の仏教社会事業の研究の前提は前述したような仏教批判・否定の時代的風潮の真只中で着手されたものであることを認識しておく必要がある。そして『佛陀』誌それ自身もまさにこの時代的の課題に応えるものとして発刊されたものであり、「大乘仏教の社会理論と実践」の確立を志向する一領域として仏教社会事業の分野が存在していたと考えられる。よって、彼の仏教社会事業思想分析の基礎的作業として、先ず彼の仏教理解を明らかにしておく必要があることは当然である。

浅野は、教学的な經典分析によって信仰の内実を問うと言うような方法論ではなく、仏教は時代性と地域性としての特色を持った存在であり、經典に見る仏教の社会实践性もそれに基づき展開するものであるとして、それを具体的な歴史事実から読み取り、歴史上における仏教の有効性を論じていく手法を採っている。そのために、「佛祖の行履に倣へ」として「吾々の奉ずる大乘佛教は、その高き社会的実践性の故にこそ、今日に至るまでの存在を維持し来つたのだ。即ちそこには、存在の理由があり、必要性があつたからだ」⁽¹⁵⁾として、仏教の社会实践性を高く評価し、日本(＝地域性)における現代の社会不安(＝時代性)に対して大乘仏教の精神の発露として時代性と地域性に適合する大乘仏教として「如何なる実践」と「如何なる社会案」を持つことができるか否かが問われているとの時代的認識を持っていた。

大乘仏教の「実践・社会案」として浅野が構想したのが「寺院のセトルメント化」である。『佛陀』誌に発表された仏教社会事業に関する論稿の大半が仏教主義セトルメントの提唱であった。例えば、「利用されぬ農村寺院」⁽¹⁶⁾では、寺院の使命を「公共的・共益的」なものであるにもかかわらず、所謂「寺族」による寺院の私物化が進み、「今日の寺院のレーゾン・デートルは危機に瀕している」と指摘し、ここからの打開を求めて仏教主義セトルメントを展開している大阪・光徳寺善隣館での佐伯祐正の実

践⁽¹⁷⁾を高く評価しながら「農村寺院の農村セトルメント化こそは、まことに重大なる価値をもつもの」であるとしている。仏教の社会的実践として社会事業・セトルメント実践が浅野の構想する大乘仏教の現下における「実践・社会案」であり、これの歴史的な裏付けとして聖徳太子をはじめとする仏教者の社会事業実践の研究が存在している。

そしてこの研究は、佛陀社の出版物として発表したパンフレットにより国内の事蹟のみならずインドや中国までその範囲を拡大した業績を発表している。浅野のこうした仏教社会事業への研究を支えたものは、宗教批判・否定論の横行と数多くの新興宗教が誕生する時代的背景のもと、既成仏教に属する彼の信仰の立場からの危機意識がその底流にあった。それゆえに仏教の正当性と社会的有効性を科学的に証明する作業として仏教社会事業の歴史的研究を手がけ、更には、ここに立って現下での既成仏教の進むべき方向性を示していったのである。

浅野の仏教セトルメントの提唱は、提唱に止まらず自らもこれを実践しようとしている。それは、1934年が時恰も丁度仏誕2500年に当たり、これを記念して「佛陀社セトルメント」創設の宣言をなしている。宣言文に

我が社は、去る四月八日の釈尊降誕会たる花まつりの佳き日に臨んで、佛陀社三大期誓なるものを発表した。これ吾人の現代的佛教信条の表白であつて、今や進んで吾人はその社会的実践の門出として、茲に佛陀社セトルメントの創設を江湖に告ぐるの喜びを持つ。

活力と財力とに乏しい吾人は、今や僅かに其の一步をしか踏み出し得ざるものであるが、しかし、大乘佛教に立脚し、所謂トエンビー的精神を其処に充分に開眼せしめて、やがて適切なる総合的施設たらしめんことを念願する⁽¹⁸⁾。

ここに浅野の人物像を垣間見ることができる。すなわち、彼は単なる研究者ではなく研究と合わせて自らがそこでの主張を実践として展開していく姿勢を持っている。それは、彼が教育運動に関係した時期も同様であり、終始一貫して研究と実践を同時に志向した存在であった。佛陀社セトルメントの活動は、その後具体的にどのような取り組みられていったか不明であるが、浅野の生き方を示す端的な事例

であろう。

『佛陀』誌の編纂と毎回の論文執筆，そして社会的実践というように寸時を惜しんでの彼の仏教研究と実践は止まることを知らなかった。そればかりか，同時期には東京府社会事業協会が発行する雑誌『社会福利』⁽¹⁹⁾やその他の雑誌にも多数の論文を発表しており，想像を絶する多忙な日々を送っていたことが推察できる。

5. 『日本佛教社会事業史』の出版について

1934年12月，浅野は仏教社会事業史に関する既発表論文を一冊の書として纏め上げ，『日本佛教社会事業史』と題して凡人社より出版した。出版の意図について浅野は次のように記述している。

既に古く，我が日本に於ては，あらゆる部門に浸潤して，広汎な社会事業が佛教徒たちの手によつて運営されてゐたのであつた（中略）而して，かかる日本佛教徒の社会实践の源流は，勿論，これを遡つて支那佛教に，更に遠く印度原始佛教に於て，見出さるのである。かくして佛教史の社会的考察は，少くとも其処に，澆漓たる社会事業の実践の一大系列を発見せしめずには措かないのである。

本書は，正に，かかる社会事業実践の史的研究を企図せるものである。茲に本書の上梓さるる所以は，この程度のすら現存せず，且つ現下斯業界に於ける緊急なる待望にひと先ず応答せんがためである。（中略）最後に，此の貧しい著作ながら，これが真の「佛教復興」の助縁とならんことを切望して止まない。けだし，佛教の真生命は，必ずや一面，その生々しい社会实践の裡に実現されねばならぬからである⁽²⁰⁾。

上記の文章において浅野は本書発刊の狙いを1つに仏教社会事業実践史の研究，2つに「佛教復興」への寄与を期待したものであることを述べている。文中指摘の如く確かに仏教社会事業史研究は，社会事業史研究一般で，または日本仏教史研究一般で部分的に取扱われることはあつても，これのみを単独の研究対象としたものは，個別の論文は別として日本仏教文化史的視点から著された橋川正著『日本佛教と社会事業』（1925年6月）と谷山恵林「佛教社

会事業史 上・下」（『佛教大学講座』1933年）しか存在していなかった⁽²¹⁾。前者の橋川の著書は，浅野自身，度々引用・参考にしながら研究を展開させている。

彼の研究手法は，もちろん，本書では社会事業「実践」に焦点を当てつつも，「或る人の行蹟を研究するためには，その時代環境を見ること，並にその生活記録を知ることが必要であると共に，またその人の抱懐せる思想を考察することが，必要不可欠なことである」⁽²²⁾として，実践をただ単に時系列的に羅列するのではなく，課題人物の生きた時代の分析とその人物に関する史料の吟味，そして思想を踏まえた上で実践を明らかにしていく手堅いものであった。それぞれの人物に関する史料の選別の能力には確かなものがあり，今日の研究においても一級史料として取り扱われるものを基本にしながら研究を展開している。

出版意図の2つめとして仏教復興への寄与を掲げた。当時の仏教界は，宗教批判・否定＝反宗教運動への国家の弾圧後，友松円諦や高神覚昇などジャーナリズムによって新たな仏教運動が形成されてくる。この動向に対して浅野は寧ろ批判的立場に立ち，現下で現象的に展開する仏教復興運動の「その後」こそがこの運動の評価として問われる問題であり，それは1つに仏教復興を契機として真の求道運動が起るか否かであり，2つに既成教団の清算運動に連動するか否かが重要であると指摘し，この展望を持ってこそ「真の仏教復興」＝「仏教革新」が達成できるとした⁽²³⁾。以上の問題意識より本書の出版により具体的な仏教の社会的実践を歴史的に紐解き，仏教革新（復興）のあるべき方向を模索しようとした。

本書の構成は，序文につづき緒編総説的研究として第1章佛教と社会事業，第2章社会救護者としての积尊，第3章佛教婦人と社会事業，前編第1章日本佛教社会事業の史的要綱，第2章飛鳥時代の佛教社会事業，として聖徳太子を，第2章奈良時代の佛教と社会事業，として行基を，第3章平安時代の佛教社会事業，として最澄と空海を，第4章鎌倉時代の佛教と社会事業，として重源，叡尊，良観を，第5章江戸時代の佛教社会事業，として鉄眼と了翁を，第6章明治時代の佛教社会事業概観，後編事項別研究第1章刑務教誨，第2章死刑救助，第3章廢娼問

題、第4章禁酒問題、第5章児童保護となっており、総頁数は260頁である。

本書での研究の視点について浅野は下記のように記述している。

佛教社会事業史の究明には、何よりも先づ、その時代時代の社会経済の背景の究明を先行乃至随伴せしめねばならぬ。単なる現象形態としての佛教社会事業のケースを記述するのみでは、所詮それは御目出度き無批判的な記述に終わるであろう。それと共に、単なる編年史的記述の如きも、これ又、非体系的なるものに終わるであろう。従つて吾々は、時代別と事項別との、即ち縦と横との、二重の取扱ひを企てた所以であり、且つ社会事業の個人力の重視と云う点から、輝ける代表的事業家を拉し来つたのであるが、それは決して単なる「列伝的」なものではない⁽²⁴⁾。

以上のような研究姿勢は、本書の構成並びに個別の論及においても随所に発見することができ、本書の特徴となっている。仏教の社会的実践の歴史的研究を縦軸とすればその横軸に相当するものが1935年6月に凡人社から出版される『佛教社会学研究』⁽²⁵⁾である。歴史社会と現代社会との両面から仏教の社会的実践を究明し、その社会的有効性を主張することが浅野の狙いとして存在しており、そのような態度を表明しなければならなかったこと自体が、当時の仏教界に身を置く浅野の歴史性・社会性を表わすものである。

さて、彼の仏教社会事業史研究では、前近代・近代を通して「社会事業」の用語を使用している。今日では、前近代に展開する救済行為は慈善または救済事業と称され、近代資本主義社会以降、体制的矛盾の必然的な結果として惹起する社会的問題に対応する救済行為を「社会事業」と称し、前近代のそれと近代以降のそれとは厳しく峻別して使用するのが通例である。

上記の点について、浅野は無理解に通歴的に「社会事業」の用語を使用したものではないことは、「今日、一般に使用されてゐるような意味の『社会事業』なる術語は、全く世界大戦後、即ち大正年間に至つて、而かも其の七、八年に至つて、初めて普及されたものであつて、それ以前には、余り一般的には使用されなかつた所のものである」として社会

事業が近年使用されることになったことについての一応の理解は示している。つづけて「吾々は、現代にまで進歩し来つた所の学術上の公認語を以て、過去に於けるその該当事業をも之を研究し、分析し、批判し、綜合することは極めて必要なこと」⁽²⁶⁾として、現代の社会事業という観点から慈善救済事業を取り上げる研究を展開しようとするものであった。したがって、彼の「社会事業」用語の使用については、その概念を厳密に検討したものとは考えられないが無検討的な使用でもないことは確かであろう。

ならば浅野の構想する社会事業の概念はどのようなものであつただろうか。社会事業の考え方については、海野幸徳の研究に依拠する部分が多く、「社会事業の発生は、客観的条件として社会的疾病の厳存を持ち、主観的条件として広汎なる民衆への愛の保有を有つものであらねばならぬ」「前者は社会認識を要求し、従つて大なり小なり社会組織への批判と改革的働きかけを伴ふものである。（中略）他方、社会事業が広汎なる民衆愛の具現であることは、～之をその主観的条件とすると云ふことは～、凡ての社会的諸運動に共通する事実である。しかし特に社会事業に於てこそ、その現はれは最も柔和相を持つのである。云はば母性愛の現れが、社会事業に於て見出されねばならない」と言っている。

ここには社会事業における客観的条件と主体的契機の問題が披瀝されており、前者については当然そうであるものの、後者においては「民衆愛・母性愛」が強調され「この点に於て、宗教と社会事業とは、その基調を一にする」として宗教（仏教）社会事業成立の根拠をここに求めていく。そして、主体的契機として仏教慈悲の発露を重視し、その具体的展開としての社会的実践（社会事業）を明らかにするための検討を展開する。しかし、両者の結合方式が十分に論及されないままに直線的に積尊等を「社会事業家」として理解し、当初、彼が意図した研究手法が反映されずに終わっている。同様の考え方は浅野が社会事業の研究として多く依拠した海野自身が内包する問題点でもあり、浅野もまたこれを継承することで同様の迷路に入り込んでしまっている⁽²⁷⁾。当時の社会事業研究は、「慈善救済事業」と「社会事業」の概念を厳密に峻別して研究検討することは徐々に定着してきた時期であつたが、両者を同義

語として使用するものも多く存在していた。

戦後の社会福祉研究の高まりの中で戦前のその持つ限界点と問題点とが明らかにされ、これを克服する営みがなされるのは当然であるが、浅野の本書も今一度現在の研究レベルより再検討されるべき書物であり、史実の実証的側面からも今日の研究水準と照らし合わせて吟味されねばならない点も存在しているようである。

本書出版を記念して、1935年2月20日東京八重洲園において『日本佛教社会事業史』出版記念のタベが開催され、社会事業関係者、社会学関係者、仏教関係者など約100名近くの参加者が出席した。因みに社会事業関係者として高橋梵仙、松島正儀、三好豊太郎などの氏名を見ることができる。出席者を代表して藤原猷雪は祝辞の中で「佛教社会事業の研究者は三人である。一人は今では故人となった橋川正君であり、今一人は谷山恵林君である。それに浅野研眞君であるが、この三人の中（中略）独り浅野研眞君は佛教学に対する造詣も深く、しかも社会学を専攻した人であって、佛教学、社会学両者に通じた得難き人物」⁽²⁸⁾であると浅野人物評価をなしている。

本書出版は当時の社会事業史研究において新たな研究分野を社会学の方法論をもって開拓したものと注目されたが、それ以上に日本仏教史研究や社会学研究上での関心を集めたようである⁽²⁹⁾。

6. 「佛教社会学院」の創設と活動

1935年4月、浅野が発願者となり佛教社会学院を創設している。その発願文に

佛教は常に輝ける文化的使命を果たし来つたものである。その上求菩提・下化衆生の切々たる行履は、終始一貫し、広汎なる社会实践の芳蹟によつて、現実社会の向上と純化とに資し来つた。
(中略)

然るに今や、かかる寺院の社会的・文化的機能は、十分に遂行されつつあるだろうか？

尚又、現下の如く逼迫せる社会不安の真只中の於て、真に佛教の菩薩行を現代的に実践せんとするためには、如何なる具体的プランを以つて之に臨むべきか？

此等の切実なる諸問題の解明によつて、真に身

を以つて佛教の本具的的使命たる社会实践を遂行せんとする佛教徒（僧籍の有無を問はず）のために、茲に専門の学院を開設して、広く研修の便を与へ、以つて時代の先覚者としての有能真摯なる現代的佛教徒を養成し、佛教徒の社会活動を組織化し、宗門社会事業の体系化を図り、佛教の慧日を現代に光被せしめんと念願する次第である⁽³⁰⁾。

浅野の行動派としての姿勢は、仏教の社会的実践を研究するに止まらず、自ら実践者を養成する機関としての同院の設立に着手させる。それは、仏教への危機意識と彼自身の構想する仏教の理想を実現するためであった。

同院は、その目的として「広く佛教徒、特に青年住職僧侶並に寺院の社会活動の組織化、宗門社会事業家の養成、及び新時代に適合する寺院経営に必要な学術を教授し、併て実習を指導することを以つて目的」としており、発願文に記された内容をより具体的に示した。入学資格は、仏教徒（僧俗男女学歴は問わず）で18歳以上であること、養成機関は3ヶ月、授業は毎日午後6時から9時までの2講座と定めた。授業料は3ヶ月1期5円としている。校舎は、中央仏教会館（東京神田一ツ橋通町2の3）に構え入学者の便を図っている。

授業科目は、(A)基本講座として仏教社会学、仏教社会事業史、経済学、政治学、社会政策、社会事業概説、社会衛生、社会教育、労働問題、農村問題、婦人問題、児童問題等、(B)特殊講座として宗教制度、民衆娯楽、仏教美術、仏教文芸、移民政策、司法保護、融和事業、社会保険、時事問題等、(C)その他に科外講義、討論会、見学実習等も開講するとしていた。1935年の1年間の活動報告を「佛教社会学院小誌」として『佛陀』誌に載せている⁽³¹⁾。これによって活動の概略を見ておこう。

同院の開設を宣言した1935年1月より浅野はそれへの協力を得るために1月から3月にかけて京都を中心に同志への説明、更には東西両本願寺、妙心寺、そして大谷・龍谷の両大学、浄土宗・曹洞宗・日蓮宗各宗務所、仏教連合会などを精力的に駆け回り、同院開設の趣旨説明と協力の要請を行った。

当初の予定より1ヶ月おくれて5月1日佛教社会学院は開講した。当日、第1期開講記念講演会を開催し、「佛教的社会实践」を浅野が、「佛教と婦人間

題」を清谷閑子、「最近アメリカの宗教事情」を山内脩謙、「最近ドイツの宗教事情」を榊原順次が各々講演している。正規の講義と担当者は次の通である。社会調査（古坂明詮）、社会衛生（諸岡存）、労働問題（赤星四七郎）、佛教社会事業史（浅野）、児童保護（高橋梵仙）、公民学（山内脩謙）、佛教社会学（浅野）、農村問題（馬場明男）、特別公開講座として「司法保護事業—特に思想犯問題に就て」（近藤亮雅）、「佛教美術について」（岡本貫榮）、「宗教制度に就て」（伊藤道学）、「教団の研究」（久保田正文）、「佛教社会事業の展望」（長谷川良信）などが担当した。また、社会施設見学として、猿江隣保館、あそか病院、三輪学院、慈光学園、上宮教会、四恩瓜生会などへ日曜日毎に出かけている。1935年6月30日に第1期終了式が行われ、修学者20名が修了書を受け取っている。つづく第2期の修了者は11名である。

当初の予定では修学期間を3ヶ月に定めていたが実際は2ヶ月で修了しており、開講科目についても基本の上に特殊という形で検討され体系的に実施するのではなく、講師陣の都合によって随意開講となっていたようである。講師の顔ぶれは、浅野と何らかの関係のある人々が担当してしており、彼等の多くは、同院の顧問や評議員に名前を連ねている人々であった。

1年間の同院に関わる収支について見ると、収入789円87銭で支出が1003円28銭と報告されており不足額が213円41銭となる。これも、『佛陀』誌出版同様実施を重ねれば重ねるだけ赤字を出すこととなり、浅野個人の生活を脅かしていった。

しかしながら、浅野にとって個人生活が犠牲になっても、この事業は実施しなければならない仏教者としての使命を自覚しており、死を覚悟してこの事業を遂行するとの決意を持っていた。

仏教社会事業の実践を含む社会的実践者の養成を目的とした同院は、財政的のみならず養成期間、科目設定や講師選定の問題などで限界点を持っていた。このこと自体は、当の浅野自身が十分承知していることであり、それでも「仏教の社会的実践」を主張する彼としては研究と実践を同時的に展開することこそを最重要視し、困難な事業であることは覚悟の上で着手していった。実は、この点にこそ浅野の教育労働の分野でも、また仏教の分野でも終始一貫し

た態度であり、彼の実像はここに存在していた。

因みに、昭和期における社会事業従事者養成は、主として仏教系大学やキリスト教系大学によって着手されていたものの、戦時色が強まるこの時期は、この方向への再編成を大学自らが積極的に進めていく社会事業教育の変質過程にあたる。それは、同教育における翼賛体制への協力として位置付けできるが、内容的には社会問題への解決・緩和を学理上・実践上志向する学問から、戦時体制を支え戦争を遂行のためのもの（＝厚生事業）へと大きく変質していく⁽³²⁾。「社会」という用語自体が禁句的存在となり、大学においても社会学や社会事業を専攻する学生が激減し、関係学部・学科の名称も改称されるようになる。こうして徐々に社会的視点で社会事象を捉えることが制限される中で、同院は、教育内容では大学のそれに比較するには無理があるものの、あえて、仏教が関わりを持つ社会問題を真正面から取り上げ、時流に流されず社会的視点から「仏教の社会的実践」を教授しようとした視点は注目に値するものである。しかし、同院の活動がその後どのように展開していったかは記録の上では発見できず不明である。

むすびにかえて

浅野研真に関する先行研究を今回新たに発掘した『佛陀』誌や証言によって、特に仏教社会事業に関する部分についての補填と彼の研究・実践の位置付けを行ってきた。そして、幾つかの点において今後事実確認が必要な個所も出てきた。浅野晩年の生き方は、前半の教育運動に関わった時期と同様、研究と実践とを仏教界において精力的に展開し、終生、このスタイルは堅持しつづけている。浅野の晩年を仏教社会事業の研究と実践のみで捉え描くことが困難であることも痛感した。すなわち、浅野活動の他の分野、例えば仏教社会学研究や邪教撃滅運動などについても検討を要するものであるが、少なくとも今回小論において『日本佛教社会事業史』の出版（仏教社会事業研究）や「佛教社会学院」の創設とその活動が、どのような社会的背景のもとでの浅野の意図にもとづきなされたものであったかは明らかにできたように考える。そして、浅野の社会活動と

しての仏教社会事業（史）研究や学院設立は、社会事業の課題として意義あるものであったが、それ以上に、寧ろ仏教革新（復興）運動の一環としてなされており、近代仏教史の中で正確に位置付けされなければならない課題性を持っていることも明らかとなったであろう。さらに指摘すれば、浅野が終生のテーマとして持ちつづけた一向一揆に関する研究（遺稿原稿）も、戦前におけるその研究史の上からも取り上げられる価値あるものであると考える⁽³³⁾。

※ ※ ※ ※

この小論の作成にあたっては、滋賀県愛知郡在住の浅野研真の長男・浅野文雄氏より雑誌『佛陀』全巻の他多くの史料の貸出しを快諾頂き、聞き取りなどにもご協力頂いた。また、名古屋市在住の庄司暁憲氏にもご高配を賜った。ここに記して感謝の意を表わす。

註

(1) 浅野についての先行研究としては、池田種生『プロレタリア教育の足跡』（1971年 新樹出版）、柿沼肇「浅野文庫目録」（『教育運動史研究 9・10号』1967年・1968年）、峰島旭雄「浅野研真～仏教と社会主義の間～」（峰島旭雄編『近代日本の思想と仏教』1982年 東京書籍）、森龍吉「浅野研真」（柏原祐泉他著『求道の人びと～近代仏教百年の歩み』1969年 春秋社）等がある他、塩田庄兵衛編集『日本社会運動人名事典』1979年や近代日本社会運動史人物大事典編集『近代日本社会運動大事典 第1巻』1997年等でも取り上げられている。これらの先行研究では、峰島論文を除いて浅野の仏教社会事業の業績についてはほとんど触れていない。浅野著『日本佛教社会事業史』の解題については『戦前期社会事業基本文献集37 日本佛教社会事業史』（1996年 日本図書センター）で硯川真旬が行っている。

なお、本稿作成にあたり峰島旭雄「前掲論文」より多くの示唆をえた。

(2) 註(1)で示した浅野についての記述中、その誕生についてはすべて「長男」としているが、浅野自身が後に懐述した記録によると、「尾張中

学校在学してゐた時分、たしか四年生か五年生（中略）、その時までには、既に兄と父と弟を喪い（中略）母と二人きりになつて了つていた私」（『求道夜話』（『佛陀』第2巻第6号 1939年6月2頁））としており、「長男」説の根拠が失われることになる。この点については後日別稿において明らかにする予定である。

(3) これらの他、単行本の著書として『労働学校研究』（1925年 三田書房）、『インタナショナル発達史』（同上年 文化学会）、『日本労働運動史』（1926年 進め社）他、多数存在する。

(4) 浅野のフランス留学は、文部省派遣の国費留学であったが、浅野の長男・文雄氏の証言によれば、留学途中でその資格は剥奪をされ、留学後半は私費留学生として経済的に非常に厳しい状況の中での調査・研究であったこと、また、留学期間中に日本大学文学部社会学科助手の職も解かれたとの談話を得た。

(5) 岡本洋三「戦前教育労働運動史研究の問題点」（労働運動史研究会『教育労働運動の歴史』1970年）48頁、49頁。

(6) 池田種生は浅野の人物像について、「浅野君は、不遇であったばかりでなく、ともすれば誤解されかねないところもあった。なるほど、彼は教育畑出身ではないので、教育の現状を論じたりしながら、教育界の実状にうとかった。従って、浅野君はマルクス主義の理論を、直線的に教育論へ持ち込もうとした。——というよりは、いくぶん学者ぶる、ペダンチックな傾きがみられないでもなかった。また、文章表現にも、才気にまかせて書いて、吟味や慎重さを欠く面がみられなくもなかった。だが、人間的には、彼はきわめて大衆的な開放的な面を持つ明るい性格の持主であった」（池田種生『前掲書』176頁）

(7) 峰島旭雄「前掲論文」355頁。

(8) 「佛教社会学会」パンフレット

(9) 因みに同学会の活動の一例として研究会での研究題目と発表者の氏名を掲げておく。

第3回研究会 現代社会情勢と日蓮上人の国家思想（牧野内寛清）、最近史的唯物論者による仏教起源論の二三について（奥山道明）、明治初年の社会情勢と佐田介石（浅野研真） 第4回

- 研究会 ギュヨーにおける宗教消失論の帰結(吉永十果), 明治初年の東北仏教界の情勢(緑川光覚), 仏教社会学の問題と方法(鈴木景山), 釈迦日本人説の核心(寺田弥吉) 第5回研究会 仏教運動の社会案(浅野研眞), 仏教運動の根本問題(好村春輝), 最近支那仏教界の状勢(藤井草宣) などである。
- (10) 『佛陀』(第3巻第10号 1930年10月) 14頁 本文中に掲げた一向一揆研究以前のものとして雑誌『現代仏教』に「一向一揆史考」と題して1927年6月・7月・8月・10月・11月号に投稿している。また「讀賣新聞」にも「階級闘争と見る一向一揆の史実」と題して1931年12月24日～27日まで連続4回連載されている。
- (11) 『佛陀』(第3巻第11号 1935年11月) 2頁
- (12) 『佛陀』誌の全貌については、復刻版として近日中に出版する計画を進めている。
- (13) 『佛陀』(第5巻第11号 1937年11月) 7頁。
- (14) 『佛陀』(第1巻第1号 1933年9月) 16頁
- (15) 「大乘佛教と社会实践」(『佛陀』第1巻第1号 1933年9月) 11頁
- (16) 『佛陀』(第2巻第12号 1934年12月) 3頁～5頁
- (17) 佐伯祐正と光徳寺善隣館についての分析は、拙稿「仏教寺院の地域開放とセトルメント—佐伯祐正と光徳寺善隣館—」(『佛教大学佛教社会事業研究所年報 第3号』1986年5月で発表しているので参照されたし。
- (18) 『佛陀』(第2巻第6号 1934年6月) 12頁
- (19) 因みに、『社会福利』誌に発表した論文名を掲げると「フランスの社会事業学校」(第14巻第5号・6号), 「ヨーロッパに於ける婦人の社会的活動に就いて」(第14巻第7号), 「労農ロシアの新風景(紀行文)」(第14巻第8号), 「パリの夜と浮浪者の群れ」(第14巻第9号), 「社会調査の方法」(第14巻第10号), 「或る死刑囚の手紙」(第14巻第11号, 第15巻第2号), 「社会事業家としての行基菩薩」(第16巻第11号), 「社会事業家としての鉄眼禪師」(第17巻第7号), 「社会事業家としての伝教大師」(第17巻第8号), 「社会事業家としての弘法大師」(第17巻第10号), 「社会事業家としての忍性菩薩」(第18巻第2号), 「社会事業家としての俊乘房重源」(第18巻第5号), 「社会事業家としての興正菩薩叡尊」(第18巻第7号), 「社会事業家としての了翁禪師」(第18巻第9号), 「古代印度の佛教社会事業」(第19巻第1号), 「隠れたる社会事業家を顕彰せよ」(第20巻第2号), 「英国農業労働者の史的素描」(第21巻第9号, 第11号), 「社会集団論」(第22巻第3号), 「社会集団論 モーニエ教授」(第22巻第4号), 「モーニエ教授社会集団論」(第22巻第5号・第7号・第10号・第23巻第7号)
- (20) 浅野研眞著『日本佛教社会事業史』1934年凡人社 序文
- (21) 橋川正『日本佛教と社会事業』についての詳細な解題は長谷川匡俊の『戦前期社会事業基本文献集29日本仏教と社会事業』があるので参照にされたし。
- (22) 浅野研眞『日本佛教社会事業史』1934年12月凡人社 62頁
- (23) 「真の佛教復興」(『佛陀』第2巻第9号1934年9月), 「佛教復興批判」(『佛陀』第2巻第11号1934年11月), 「佛教復興以後」(『佛陀』第3巻第1号 1935年1月)
- (24) 浅野研眞『註(22)に同じ』13頁～14頁
- (25) 『佛教社会学研究』の構成内容のみを掲げておくと, 第1篇佛教社会学の基礎概念, 第1章佛教社会学の建設, 第2章佛教社会学とは何か, 第3章佛教社会学の対象と方法, 第4章佛教社会学の諸部門, 第2編佛教社会学の諸部門, 第1章佛教と家族現象, 第2章佛教と道德現象, 第3章佛教と法律現象, 第4章佛教と政治現象, 第5章佛教と経済現象, 第3篇佛教の社会形態学, 第1章佛教の社会観, 第2章佛教の社会起源論, 第3章佛教のユトピヤ
- (26) 『註(22)に同じ』8頁～9頁
- (27) 海野幸徳や浅野研眞の社会事業論についての批判として, 孝橋正一『社会科学と現代仏教』1968年があるので参照にされたし。
- また, 浅野の社会事業論については, 後日別稿にて検討予定である。
- (28) 『佛陀』(第3巻第3号 1935年3月) 10頁, 11頁
- (29) 本書に対する「書評」として日本仏教史研究

の立場から禿祐祥や徳重浅吉が、社会学研究の立場から円谷弘や岩崎卯一などが、それぞれ高い評価をなしている。（『佛陀』（第3巻第2号・第4号 1935年2月・4月）

- (30) 『佛陀』（第3巻第2号 1935年2月）2頁
- (31) 「佛教社会学院小誌」（『佛陀』第4巻第3号 1936年3月）7頁～9頁
- (32) 戦前の仏教社会事業教育史については、拙稿「戦前の仏教福祉教育」（池田英俊他編『日本仏教福祉概論—近代仏教を中心に』1999年 雄山閣出版）や拙稿「戦前の福祉教育と仏教」（峰島旭雄他監修『現代日本と仏教Ⅳ福祉と仏教』2000年 平凡社）を参照されたし。
- (33) 浅野研眞『一向一揆史』（遺稿原稿）の内容は次の通である。

第1部一向一揆の基礎的研究 第1章一向一揆を生んだ社会環境 第2章「一向」及び「一揆」の基礎概念 第3章一向一揆の基礎概念 第4章農民戦争としての一向一揆 第5章一向一揆の分類 第2部一向一揆の史的展開 第1章蓮如上人と一向一揆 第2章実如上人と一向一揆 第3章証如上人と一向一揆 第4章顕如上人と一向一揆 付録1年表 2文献 3系譜（峰島旭雄「前掲論文」 366頁～7頁）

尚、本稿は、日本仏教社会福祉学会第35回研究大会（2000年9月10日）において「浅野研眞研究～雑誌『佛陀』を素材として～」と題し口頭発表したものを文章化したものである。